

Project Based Learning 再考

Review of Project Based Learning

梶原 綾乃

2014年4月に赴任して以来、様々な Project Based Learning（以下 PBL）を行ってきた。PBL は、日本語学習の延長としての活動はもちろんだが、留学生が社会参加するためのトレーニングも兼ねた活動でもある。また PBL は、留学生同士が協働で課題を遂行する過程を通して、レベルや国籍を超えて学びあう関係をも作る。さらに大学というフィールド内で、毎年継続的に行うことで、学部生になった先輩と後輩の関係づくりや、大学内での留学生別科生の認知度を高める効果、また留学生自身が朝日大学に帰属意識を持つようになったことを紹介する。本稿では、過去 2014 年度から続けてきた PBL の二つの活動を振り返りながら、PBL を行う際の留意点と今後の課題をまとめた。

キーワード： Project Based Learning、インタビュープロジェクト、アンケートプロジェクト、
学びの環境、学生の主体性

1. はじめに

教壇に立つ者なら誰でも短期間で効果的に教育活動を行いたいと考える。その方法として二つの教育手法が考えられる。一つは教師主体で指導法を工夫、開発するものである。もう一つは、学習者を主体にして学びの環境を整え提示するものである。昨今注目されているアクティブラーニングや今回の Project Based Learning(以下 PBL)は、その後者に該当する。

PBL は、一つの課題達成に向かって学生全員が様々な役割を認識しながら行動を「余儀なくされる」活動である。そこに正解はない。あるのは規定の時間までに他者と協働しながら仕上げなければならない課題だけがある。それだけに、明確な評価は難しい。学生主体であるため、学生自身がどのように学んだかという過程が重要であり、教員が予め結果を想定していてもそれを数値化して測る術はない。また、学習者主体と言いながら、最初は半ば強制的に行われる活動と言っても仕方があるまい。

だがそこに、学習者と教師以外の第三者を巻き込むことによって、学習者はそれぞれに意味や意義を見出している。具体的に何を得たかと問う機会も術もないが、活動を継続していくことで、参加するメンバーや課題は違っても、共通する問題や効果が見えてきた。

2014年4月に赴任して以来、様々なPBLを行ってきたが、今回は二つのPBLを振り返りながら、PBLを行う際に留意していた点と今後の課題をまとめてみたい。

2. インタビュープロジェクト

2019年度前期でインタビュープロジェクトも8回目を迎えた。一時は、年に2回行ったり、教員の都合でできなかった時期(2016年前期)もあったが、2014年前期から2019年度前期までに、在籍する全学生のべ366名が参加した大きなイベントとなり、伝統化しつつある。

当初はペアワークとして行っていた活動も学生数の増加もあり、中上級、中級、初級レベルの3名の学生を組み合わせたグループ活動に変更した。それによって、学生たちの課題や役割がさらに明確になった。またゲストには、別科の教職員以外にも、経営学部、法学部の学部長や教員、教職課程センターの教員、学事二課や学生課、図書館や食堂等の職員など大学の関係者から多くの協力を得てきた。このインタビュープロジェクトを通して、留学生のみならず別科教員の人間関係も広がり、留学生別科の認知度も高まったと実感している。

今では、プロジェクトが始まると教員がSNSでつぶやけば、何十人の修了生たちの「イイネ」が返ってくる。また他校に進学したり就職したりした学生が別科に遊びに来たとき、インタビュープロジェクトの冊子を開きながら、思い出話に花が咲くこともある。

もちろん8回も続けていると、様々な問題点も浮き上がってきている。毎回のゲストの確保とプライバシーの問題、記事入力する際の時間と量、冊子完成までの資金と時間…また、留学生のメモスキル、要約スキル、記事にする際の「見出し」の難しさ…そのような問題点や課題を毎年改善、修正しながら、できれば今後も続けて、より体系的な形にしたいと考えている。

年度	ゲスト	学生	国籍
2014年度前期	21名	42名	ベトナム、中国、ドイツ、ミャンマー、ネパール
2014年度後期	18名	36名	ベトナム、中国、ドイツ、ミャンマー
2015年度前期	18名	34名	ベトナム、中国、ドイツ、ミャンマー、マレーシア
2015年度後期	20名	40名	ベトナム、中国、ミャンマー、マレーシア
2016年度後期	26名	52名	ベトナム、中国、モンゴル、ミャンマー、タイ、ドイツ
2017年度前期	17名	51名	ベトナム、中国、モンゴル、ミャンマー、ドイツ
2018年度前期	20名	55名	ベトナム、モンゴル、ドイツ
2019年度前期	19名	55名	ベトナム、ネパール、パキスタン、中国、モンゴル、タイ、ミャンマー、イタリア

表1 インタビュープロジェクト ゲスト数、参加学生数と国籍



図1 完成したインタビュープロジェクト冊子（2019年度まで）

3. アンケートプロジェクト（異文化理解）

年度	学生数	国籍
2014年度後期	15名	ベトナム、中国、ドイツ、ミャンマー
2015年度前期	23名	ベトナム、中国、ドイツ、ミャンマー、マレーシア
2015年度後期	17名	ベトナム、中国、ミャンマー、マレーシア
2016年度	他教員 担当	
2017年度	他教員 担当	
2018年度後期	20名	ベトナム
2019年度後期	4名	ベトナム、中国、パキスタン

※ 2015年度まで入学生必修科目

表2 アンケートプロジェクト 参加学生数と国籍

2015年度後期まで、前後期開講で新入生対象の必修科目であったが、2016年度にカリキュラム改変があり、後期の選択科目となった。梶原は2018年度より再び異文化理解を担当している。梶原（2016）の発表時に比べて、学生数や国籍の偏りが大きくなっているため、異文化理解の指導内容を、参加する学生に合わせて調整している。

2018年度の異文化理解では、全員がベトナム人留学生ということもあり、テーマを「日本の中のベトナム人留学生」として、自分たちベトナム人が日本人にどんな印象を与えているか、日本人はどこまでベトナムを知っているか等、「日本人のベトナム認知度調査」を中心に行った。活動の最中はベトナム語ばかり飛び交う授業ではあったが、日本人が自分たちをどう見ているのかを知ることで、これからの日本社会で「ベトナム人である自分」は、どう行動するべきかは、それぞれ自分の問題として真摯に考えていたようである。

2019年度の異文化理解は、初級レベルの中国人、パキスタン人と中級レベルのベトナム人2名の少数クラスであった。異文化理解の理論を講義したり、事例についてディスカッションさせたりすることは難しかったが、日本人に話しかけるロールプレイを徹底したおかげで、日本人にアンケート調査を行う際には、日本語レベルとは逆に、初級レベルの学生のほうが積極的に日本人に話しかけていた。最初は聴き取ったことをメモすることも大変だった学生たちも、少しずつコツを覚えて、聞き取れなかったときには聞き返す習慣ができていた。またこの回では、PCのエクセルでグラフを作らせて発表するところまでできた。可能であれば、今後はパワーポイントの指導もして、より表現豊かな発表会にさせたいと考えている。

4. プロジェクト実施の共通する留意点

これらのプロジェクトの特徴として、以下の点に毎回、留意している。

4-1 「Mixed Ability」プロジェクトだということ

初級から上級までが同じ目的でグループ活動を行う。もちろん、学生それぞれのレベルにあった課題は課しているが、行動するグループは、男女比や国籍比、あるいは従来の人間関係やコミュニケーションに対する積極性なども考慮して、できるだけバラバラにメンバー構成を考えている。複数回グループ活動を行う場合（例えばアンケートプロジェクト）では、毎回、グループメンバーを変えている。

学生主体といって任意のグループで行動させると、同国人同士が母語で交流し他国の学生を疎外したり、できる人、やりたい人ができない人の分までやってしまったたりという一種の活動格差が起りやすい。また活動崩壊するグループも出てくる。

だが、個別の課題を課しつつその課題を遂行するための契約的な関係（心理学における構成的エンカウンターグループと教育学のジグソー学習を参考にしている）を課すことで、協働を余儀なくする。初対面に近い状態でグループ活動をさせると、それぞれが自分の立ち位置や役割を模索し始めるが、その過程を一つの学びとして考えている。

もちろん、それでも上級の学生が下級の学生の面倒を見ることにはなるが、それはマイナスではない。上級レベルの学生はリーダーとしての経験が得られ、下級レベルの学生はリーダーモデルを得ることになる。複数回活動を続けていくと、前は下級で活動していた学生たちも、次回は上級のロールモデルを参考にしようとするべきかが、ある程度想定でき、自主的な活動が容易になるわけである。このように何度もグループ活動を行うと、契約的な関係に慣れていき、メンバーが誰であっても不満を見せず活動に集中するようになる。

4-2. 誰かのために、自分がしなければならない課題があること

これらのプロジェクトでは、自分が作成したものが「役に立つ可能性」を提示し動機づけをしている。（例えば「来年の新生のために作ろう」等）そうすることによって、課題は一つの「仕事」となり、完成に対する目標と責務が強くなる。

またそれらのプロジェクトでは、メンバー各自に必ず一つの課題を課している。インタビューでも、アンケートでも、レベル別に分けた質問項目を各自に課す。他人に任せず自分がやらなければならない課題である。自分がするしかない課題を放棄すれば、プロジェクトは完成せず、他のメンバーや第三者の日本人にも迷惑をかけるかもしれないという仕組みによって、各自の責任が明確になるのである。

任意でグループ活動をさせると、既に役割ができあがった関係の中で、できる学生が全部やってしまったたり、任せてしまったりするような現象が起こることもあるが、前述で示したように、契約的な関係だと、自分の課題を遂行するために、メンバーの協力を仰ぎ、それぞれの役割や立ち位置を模索しなければならない。学生によっては、かなりストレスフルな関係から始まる場合もあるが、最初の段階で「これは『将来の仕事（の訓練）』だ」と動機づけて、一人の「大人」としての自覚を促している。特に来日後の留学生は、日本語が十分でないため、年相応の行動や対応ができず無力感を覚える学生も少なくない。そのような学生に「日本語を使う仕事（の訓練）である」「誰かのためになることをしている」と動機づけることは、年相応に認められたいという自己肯定感にもつながり積極的に活動するようになることが多い。

4-3. 第三者の日本人を巻き込むこと

できるだけ教室外の日本人と接する機会を提供している。留学生になじみがない日本人と日本語で交流するという課題は、留学生にとって今までの日本語学習の成果が試される機会である。また初対面の日本人にどのような印象を与えるかを想像させることで、事前に何が必要かを考えさせることができ、学生たちもマナーや敬語の学習に積極的になる。

もちろん、留学生になじみがない日本人との間で意思疎通が図れなかったり、誤解が生じたりすることもある。そのためには、紹介する日本人ゲストには予め留学生が起こしがちな問題を提示しておいたり（インタビュープロジェクト）、交流直後に教員が日本人にお礼を言って回

ったり (アンケートプロジェクト) している。

さらに担当教員は、意図的に教員と日本人ゲストとの関係性ややりとりの過程を学生に見せるようにしている。「留学生が失礼なことをしたら、先生がゲストに謝罪しなければならない」という形は、「教員 VS 学生」、「日本人 VS 留学生」という関係ではなく、前述の一つの仕事として、一つの活動集団の責任者としての教員の姿を示している。その関係性を示すことで、課題に対する責任感と緊張感を促す。学生たちが課題遂行に向かう際、教員は「(失礼のないよう課題遂行を) お願いします」と声をかける。すると学生たちは「がんばります」と返ってくる。それは、学生が自分の役割や責任を自覚している表れだと考える。

4-4. 必ず成果物を残し公開すること

冊子なり、動画なり、グラフや表など、自分が日本語で何かを成し遂げたというモノが必要である。そして、その成果物は公開されるということで、学生の「よりよい作品」を作ろうという動機を提供する。プロジェクトの最初の動機づけの時間には、必ず歴代の先輩方の成果物を見せる。「自分達でもできる」という実現可能性を示唆し、「もっといいものを作りたい」という工夫する動機づけが容易になるからである。

4-5. 最後に全員がそろった写真や動画を撮ること

プロジェクトの最終日に、メンバー全員で写真や動画を撮ることで、達成感と一体感を演出している。プロジェクト開始時、活動の流れを説明するときに、最後のゴールを全員でイメージさせる。実際のインタビュープロジェクトでは、過去の先輩たちが表紙になった冊子を見せることによって、未来の自分をそこに置き換えている。ありがたいことに、活動最終日に参加者一同で撮影する際は、ほとんどの学生が出席している。それは、このプロジェクトに参加した証拠として、プロジェクトの一員としての自分を残すという意味がある。

5. まとめ

毎期、修正や改善を繰り返し続けることで、以上のノウハウが生まれ、それに伴い別科内では行事化し、半伝統化させてきた。そして、この一連の流れの延長に2018年度、2019年度のベトナム人留学生有志による学園祭出店があると考えている。

2018年度の学園祭出店は、最初に声をかけたのは教員からだったが、2019年度は学生たちから動き始めた。前年で出店までの流れが把握できていた学生たちは、教員と連絡をとりながら、新しいメンバーを集め、積極的にまとめてくれていた。残念ながら、ベトナム人だけの活動だったので、今回からベトナム語中心で話し合っていたが、それでも学園祭では雨の中、誰一人不満をこぼさず、一つでも多く売ろうとがんばっていた。学園祭終了後も、日本人学生と一緒に片づけを行ったり、打ち上げを計画したりしていた。学部生と別科生との関係も新たにでき、先輩後輩として学園祭後も交流が続いているようである。

これらの活動以外にも、クラス単位で留学生の生活実態調査を行ったり、ロールプレイドラマを撮影したり、学内案内の動画を撮影したりと様々なPBLを行ってきたが、学生たちも照れも抵抗もなく、決められたグループになって活動を楽しんでくれている。

PBLで一番重要なことは「日本語を使って、みんなで『遊ぼう=学ぼう』』ということなのかもしれない。今回の一連のPBL活動を自嘲的に説明すると、学生全員で行う「ごっこ遊び」のようなものである。完成度は決して高くはない。だがその遊びのような模擬体験を繰り返すことが、それぞれに必要な学びとなり、主体性につながっていると考える。

当初、PBLを始めたときの「学びの実践共同体」を作るというねらい(梶原2015)は、少しずつできているように思う。しかし、共同体とは不断の活動と交流の過程であり、結果ではない。今後も様々な学生がこの朝日大学留学生別科にやってくる。彼らが安心して日本語を学べる環境を提供すると同時に、その環境から少しずつ手を伸ばし足を伸ばし、日本社会に飛び出

したくなるような力と経験を、PBLを通して今後も提供し続けたいと思っている。

今回は、研究ノートとして、6年間の活動を振り返り、活動の特徴をノウハウとしてまとめた。実践研究は、結果を容易に数値化できないため、継続して活動を続けていくしかない。だが今後は、この活動で得たノウハウの背後にある様々な理論を明確にし、局所的な活動を汎用的な言語教育活動としてまとめていきたいと考えている。

参考文献

ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウエンガー(1993) 佐伯胖(訳)「状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加」 産業図書

中原淳編著(2006)「企業内人材育成入門—人を育てる心理・教育学の基本理論を学ぶ」 ダイヤモンド社

梶原綾乃(2015)「プロジェクトワークと正統的周辺参加理論——留学生が大学という実践共同体に参加するために—」朝日大学留学生別科紀要 12号 15-23

梶原綾乃(2016)「日本語能力混成クラスにおける異文化理解の授業——日本人に話しかける力の養成——」朝日大学留学生別科紀要 13号 25-37

梶原綾乃(2019)「留学生による学園祭模擬店運営～SNSを話し合いの場として利用する」～朝日大学留学生別科紀要 16号 25-36